

国際印刷大学校研究報告第5巻の刊行に寄せて

国際印刷大学校客員教授 松久 卓

国際印刷大学校は設立6年目を迎え、積極的な事業展開により、印刷界に貢献している。本学の設立理念である印刷及び関連分野の教育・研究と印刷文化の向上はその成果を研究報告などにまとめてきたが、この度、第5巻を刊行した。以下各論文の概要をまとめた。

巻頭言には木下堯博氏の「過去・現在・未来」と題し、ITの急速なる進展により、印刷産業もその情報化の一翼を担うまでに成長してきた。この教育・研究を担当する客員教授は19名となり、36学科目を担当している。各専門分野と文化的価値の創造を目指し、活動を継続しているが、印刷技術の標準化と合理化はJDFやMISなどでみられる。本年のシカゴ print05 を始め、2008年、2012年の drupa 展でなどに注目している。

木下堯博氏の「高濃度印刷画像第2報」はIPEX2002で発表されたBASFのNova Spaceによる日本での初めての印刷テストであり、この実験結果を中心にまとめたがカラー印刷再現ではグラビア印刷よりも色域の拡大が見られた。

上中義視氏の「環境対応型印刷インキ用の新しいゴムローラ」はゴムローラ中の可塑剤の移行と抽出は直径の減少と硬度上昇がみられ印刷品質に大きな影響を与える。SOYシリーズはこれらの影響を与えない評価が得られている。

三浦澄雄氏は「日本と外国の印刷研究」はTAGA,IRIAGAIと日本印刷学会の研究発表の内容と発表者を比較検討した。日本と外国との内容比較では前者が印刷関連分野の発表が少なく、後者は印刷に直接関連が多く大学、関連企業からの発表が主体で、その相違が明らかになった。

松久 卓の「天正遣欧使節随員の印刷術の習得」は帰路マカオに1年10ヶ月滞在中、船載していた印刷機と活字一式で2点の書物を印刷・出版した。「キリスト教の子弟の教育」と「日本使節対話録」はいずれもローマン体の金属活字で母型から鑄造したものであり、日本初の金属活字となった。

2005年2月2日開催されたPAGE2005での「印刷メディアの最新情報」で発表した11件の報告のうち、インドの印刷IT、少子高齢化の研究開発、CTP用のDeveloperの再生装置、True Flow Netが拓く今と未来の4件が掲載された。

詳しくは原文(PDF)を参照して下さい。

(2005年4月20日記)